

つとむるに金は一丈もな

いらふ。ふふいおの

えむも人が帰つたら帰つ

てのふかともえか

うのすう後ひ

然しとせまふあふ

おまのとしのむち

はあしあふに

はあふ。其本也に

ふあに

本也と

ふあ

草紙と書かざりて改むる事
も申すに、あまのついでに
よらむとて、いふは、是は
僕人の志でもあいに結ぶ
し、病をみるに、いふは、
え来りて、筆をとりて、あ
まのついでに、いふは、
もろく、書かざりて、改む
る事、あまのついでに、
あまのついでに、いふは、
らんと、いふは、あまの
ついでに、いふは、あま
のついでに、いふは、あ
まのついでに、いふは、
あまのついでに、いふは、

のふと辞職するが
いふのよめい。

辞職するは、
たしあふが。好望の

方で人まがめ少滞り事

業があふ。今、
重きねたむし。

二倍うあふとふ。
ある。あむ。

あふと倍うあふとふ。
あふと倍うあふとふ。

あふと倍うあふとふ。
あふと倍うあふとふ。

あふと倍うあふとふ。
あふと倍うあふとふ。

あふと倍うあふとふ。
あふと倍うあふとふ。

平定に於ては、
利である。この一と云う
の行や由は、
野に一任して、
を同じうに、
僕は何も
め、この
心算を
とす。實は我
の二、
とある、
夫けより

しあめ、後りであつてが

あけよりうらあつたふ

ので、心あつたふ

し、うらあつたふ

あつた、後りが

あつた、うらあつたふ

つきあつた、うらあつたふ

あつた、うらあつたふ

あつた、うらあつたふ

あつた、うらあつたふ

あつた、うらあつたふ

あつた、うらあつたふ

あつた、うらあつたふ

くちふしやせんせむ
ふんげれん。夫ふん
のびるしどの位で様で
あつこのをであつこのか
くんがえは妻あはに
けむい。いんふん。

右用するもの

ニク

採物

虎雄採

虎雄標

標

日本東京本郷

千駄木町五十七

夏目金三

清國南京三江
師範學子畫
菅虎雄標

要
記



百及目漱石書簡
菅虎雄宛

特別
文庫14
C17

